

里村欣三が描いた中国人像

——支那苦力を中心に——

李 雁 南*

The Image of Chinese Written by Satomura Kinzou: Focusing on Coolies

LI Yannan

In Satomura's works, the Chinese coolies are written as the brothers of proletariat and the foreigners during he was a vagrant laborer, the senior revolutionaries and the ignorant people during he was a proletarian writer, the colonial objects and the enemies after joining the army. In the end, Satomura became a supporter of the militarist war, and wrote the coolies as the mean people and the people in need of relief. The image of coolies depends on the recognition of he's own status and the perspectives decided by it.

キーワード：里村欣三，中国人像，支那苦力，プロレタリア作家，戦争文学

Key Words: Satomura Kinzou, coolies, image of Chinese, proletarian writer, the literature of wars

1930年代ごろからプロレタリア文学の作品がたくさん中国語に翻訳され、中国の左翼知識人に愛読されていた。新中国が建国したあと、最初に中国の日本文学研究界で注目されたのもプロレタリア文学であった。特に、中国体験があり、中国を舞台とした作品を書いたプロレタリア作家は中国で知名度が高い。たとえば『苦力頭の表情』で名を知られた里村欣三（1902-1945）がその中のひとりである。

里村欣三はプロレタリア作家の時代においても、転向期においても、また従軍作家になったあとでも、中国との関わりが深い。戦時中マレーシアやフィリピン戦線に従軍したことはよく知られているが、1922年20歳のときから死ぬ1年前である1944年までの間、7回も中国に渡り、中国滞在の期間が合わせて4年間を超えた¹⁾彼にとって、中国はほかのどの異国よりも存在が大きいものといえよう。

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

特に「支那苦力」と呼ばれる中国人労働者は、「ルンペン」労働者として満州を放浪していた時代から兵隊になったあとまでずっと付き合ってきた人たちであった。里村欣三の支那苦力を見る眼差しは彼自身の身分の転換と、身分によって決められる視点の転換とによって左右されたもので、満州事変従軍とその後の転向を境に、苦力をプロレタリアの兄弟とする前期と、植民対象とする後期に大きく分けられる。

1. プロレタリア兄弟で薄気味悪い異国人

1922年10月末から1924年の秋にかけて、里村欣三は徴兵忌避のため二回も満州に渡り、合わせて約1年半満州に滞在していた。満州放浪の間、ほとんど無一文な彼は生きていくために支那苦力とともに働いていた。日本を脱出した「ルンペン」労働者の里村欣三と社会の底辺を彷徨う極貧状態の支那苦力は、国籍と民族が違っていても、同じような境遇におかれていて、同じような労働をしていた間に、深いつながりができた。そのため、里村欣三の満州放浪体験を描いた作品に苦力の登場が多かった。

中で一番よく知られているのは『苦力頭の表情』である。主人公の「俺」は妓女のところで最後の金を使い果たして、仕方なく苦力の群に割り込もうとしていたが、相手にしてもらえなかった。「俺」はその冷たい態度にめげずにみんなの後について働いていたら、ひとりの苦力がマントウと漬物をくれた。苦力頭も「俺」に盃を突きつけ、「俺」の日本語に驚きながらも「感じ深い眼で俺を眺め、そして慰めるように肩を叩いて盃を揺ぶった。——やがて喰い物にも慣れる。辛抱して働けよ、なァ労働者には国境はないのだ、お互に働きさえすれば支那人であろうが、日本人であろうが、ちっとも関わったことはねえさ。まあ一杯過ごして元気をつけろ兄弟！——苦力頭のアバタ面にはこんな表情が浮かんでいた。」（里村 1985：173）

この言葉のため、『苦力頭の表情』はプロレタリア国際主義の代表作とされてきたし、里村欣三は中国人に好感を持っているといわれてきた。「ここには下づみのルンペ的な労働者たちの民族的な偏見などにわずらわされない素朴な交流がとらえられており、しかも、そういうものをとらえ得たのは、そこに、おそらく作者の体験を前提としてではあるが、やはり社会主義的な意識が存在したからであることが理解されるだろう。」（祖父江 1998：39）また、この作品は中国でも高く評価され、里村欣三がプロレタリア作家になる思想基礎が含まれているとされた。「辛い労働の中で中日両国の労働者が互いに理解し合い、心が通じ合うようになったからこそ、彼が帰国後プロレタリア作家の道を歩み始めた思想基礎が築き上げられた。」（李 1993：64）

にもかかわらず、「労働者には国境はない」という考え方も「兄弟」という呼び方もあく

までも苦力頭の口から出るものではなく、「俺」が苦力頭の表情から読み取ったものである。いいかえれば、「俺」自身の想像或いは期待にすぎない。「俺」と苦力頭との間に本当の交流があったわけではなく、「俺」の一方的な甘えしか存在していないといったほうがもっと適当かもしれない。この甘えはただひとりで異国を流浪する孤独な放浪者の人間的ぬくもりに対する渴望と放浪先で生きる道を与えてくれた苦力頭に対する感謝からきたもので、「民族的な偏見」を超えたプロレタリアの友情に繋がっているとはまだいえないと思う。その証拠に、『苦力頭の表情』には「薄汚い支那人」（里村 1985：168）、「得体の知れない薄気味の悪い支那人」（里村 1985：171）といった中国人を蔑視する言葉があるだけでなく、問題の苦力頭にしても「アバタ面の一際獐猛な苦力頭」（里村 1985：172）のように、あまりよく描いていなかった。

じつは里村欣三が支那苦力を描くとき、その粗末な食べ物や、不潔な格好や、不思議な生き方などを、生理的な嫌悪があると思われるほど、悪い言葉を使ったことが多い。

まず、中国人を不潔なものとして、「臭い」「汚い」といった悪い形容を使い尽くすつもりでもあるかのようにさんざん貶めたのである。たとえば、中国人のたくさんいる汽車に乗ったら、「大蒜の悪臭と、どろどろのボロ衣服から発散する異臭が、車内の空気を泥にしている。」（里村 1935：55）と、短い一文に「悪臭」「どろどろ」「異臭」「泥」を重ねて使うことによって、中国人を嫌がる気持ちをあらわにしている。

また、マントウや長ネギだけでも生きられ、生涯にわたって女をもつことがなくても大丈夫という支那苦力を、里村は驚異と軽蔑を交えた複雑な目で眺めていた。「忍耐強いこと、まるで牛のやうな彼等」（里村 1928b：75）というふうに、支那苦力の生き方に驚嘆したのではあるが、ここには民族的な偏見を超えたプロレタリア国際主義というものは全く存在せず、むしろその驚嘆の中に日本人である自分とは全く違う異類か他者に対する偏見が読み取れると思う。

このように、里村欣三は支那苦力を一方的に兄弟だと思って苦力の群に無理に割り込もうとしながら、支那苦力を異国の他者として本能的な嫌悪を持って眺めていた。この眼差しの根底には里村自身が徴兵忌避で日本人として失格者である自分に対するコンプレックスと、日本の満州進出にしたがってだんだんと植民地化された中国に対する蔑視を日本人としてどうしても免れないといった複雑な主体の在り方がわだかまっているのである。

2. 革命の先輩で無知無謀な民衆

満州放浪から帰国した里村欣三は『文芸戦線』同人となり、プロレタリア作家として活躍していた。その間にも依然として中国への関心は変わらなかった。1926年から1927年

にかけて、中国の北閩戦争と民主主義革命に対する憧れを持って、二回も上海に渡った。一回目は北閩軍に参加しようとしていたが、失敗して日本に逃げ帰ってき、二回目は『文芸戦線』特派員として小牧近江といっしょに行ったのである。

この二回目の上海渡航のとき、里村と小牧は郁達夫をはじめとする中国の有名な作家たちと歓談し、中国の革命に多大な情熱を寄せていた。ルポ『青天白日の国へ』において、中国の革命者が「我らの先輩」（里村・小牧 1927：46）と呼ばれるほどで、まさに里村欣三が描いた中国人像の頂点であった。この時期は里村欣三がプロレタリア作家としての活躍期で、また日中両国のプロレタリア同士の協力を最も情熱を持って期待していた時期でもあった。

しかし、当時の上海は革命の情熱に巻き込まれていながら、「白色恐怖」²⁾と呼ばれる蒋介石政権が中国共産党を鎮圧するための反共クーデターもあった。貧しい人々を心から同情していた里村欣三はもともと大資産家の利益を代表する蒋介石政権におのずからあまり好感を持っていなかったようである。上海から日本に帰ったあと、革命的情熱が冷めて、上海の情勢と中国の北閩を傍観者の立場から冷静に考える余裕ができてきたとき、『動乱』と『兵乱』の二作が生まれたのである。

『動乱』は上海を舞台にし、政治的関心を全然持たない船大工朱敬鎮夫婦が北閩運動によって引き起こされた動乱の中で一人息子を失い、最後に朱自身も射殺される話である。朱一家は中国の無産階級に属しているにもかかわらず、北閩運動への関心も参与もなく、また北閩運動から救われることもなかった。そればかりでなく、かえってこの運動の被害者となってしまったのである。その無智と不幸に対して、一人称の主人公「私」は全くの傍観者で、「××も、動乱も、そして嵐も、何にもかも一切が私を置き去りにしたのだ。自分は孤獨な放浪者だ。」（里村 1928a：42）とあったように、放浪者という一語で、上海の動乱と中国の無産階級の境遇を、あくまで手を拱いて傍観の態度で通そうとしていたわけである。

また「革命は無秩序な騒音である！」（里村 1928a：43）と、北閩軍入城直前の上海群衆のデモ行進を盲目的な騒動として描いた。その描き方は同じく 1928 年から書き始められ、中国の民主主義革命を背景とした横光利一の『上海』と似ているところが多い。たとえば、騒動する中国民衆を、里村欣三は主人公「私」の酔った目に見える異様な風景として、「群衆の流れが、廣場に吸ひ寄せられてゐた。それが、酔つた私の眼にも幾萬と知れない黒さに感ぜられた。黨旗、スローガンの幟、組合旗、そして動搖めく群衆の黒さ！」（里村 1928a：43）と描いた。これに対して、横光利一の『上海』では、主人公參木が頭上の回転窓から群衆を眺めていたのである。「その窓のガラスには、動乱する群衆が総て逆様に映つてゐた。それは空を失つた海底のやうであつた。無数の頭が肩の下になり、肩が足の下にあつた。彼らは今にも墜落しそうな奇怪な懸垂形の天蓋を描きながら、流れては引

き返し、引き返しては廻る海藻のやうに揺れてゐた。」（横光 1970：66）この横光利一は『上海』の最後に「明日から、もし陸戦隊が上陸して来て街が鎮まれば、またあの日のやうに、自分はここでぼんやりとし続けてゐなければならぬのだらう。」（横光 1970：96）と書いて、日本軍の上海侵入を救いにしていたのである。この一語だけでも戦後その戦争責任を追究されたのも無理はないといえよう。そんな横光利一と似通った描き方でプロレタリア作家の里村欣三が中国民衆のデモ行進を描写したのは明らかに不合理なことである。

酔った目に回転窓、両方とも中国の群衆をまともに真正面から取り扱わず、無機物の盲目的な動きとみなしたのである。このような描き方の中には、中国の革命を真に理解しようとして、かえってそれを自分と関係のない他国ないし別世界のできごとで、しかも目的ある革命ではなく、群衆の無智による機械的行動でしかないような、徹底した傍観者の無関心な態度と蔑視が存在するわけである。

ここには、里村欣三のプロレタリア作家としての限界が見られると思う。「プロレタリア作家としては、労働者がおかれている切実な現実を自分の問題として背負いきれないという欠点をもった作家であった。」（澤 2005：48）というのはプロレタリア作家の里村欣三に対する適切な評価かもしれない。里村欣三はあくまでも革命の、ないし中国と中国人の、真の理解者ではなく、異国の傍観者の域を出られずにいたのである。中国の民主主義革命は里村欣三にとって、放浪者の目に映る途上の風景、または傍観者の目に映る対岸の火事ではなかった。

一方、中国の農村を舞台にし、同じく北閩戦争を背景とした『兵乱』は戦乱に陥った中国の農村を描き、二人の農民運動のリーダーが北閩戦争に対する意見の分岐を最後に提示した。『動乱』のように一人称の主人公を設けずに、直接三人称で、戦乱を利用して農民の土地とお金を巻き上げようとした大地主と高利貸、それに戦乱を怖がって逃げ回る農民を登場させたのである。最後に北閩革命を支持し、蒋介石政権を信じる農民リーダーは農民武装を大地主の管理下にしたが、反対の意見を持つもう一人は「新しい政治権力と真正面にぶつかつて闘争し得る組織と訓練をもつだけの準備にかからう。」（里村 1930：181）といて故郷を離れた。それから三日目に国民革命軍が入ってきて、農民武装を解除した。

『動乱』より『兵乱』のほうは中国への関心のはるかに強かった。中国の農村と農民をまともに描いた傑作と思われるが、一方、そこには里村欣三の、中国民主主義革命に対する深い懐疑と、蒋介石政権に対する強い反感も示されたと思う。無産階級と革命はこれからの方向に向かっていくべきかという重大な課題が『兵乱』によって提出されたのであるが、それは里村自身の思想上の行き詰まりを物語っているだけではなく、彼を取り囲むプロレタリア文学運動の数々の内部闘争と分裂も影濃く感じられるのではないかと考えられる。

いわば、この時期は里村欣三がプロレタリア文学運動とその中にいる自分の在り処を再認識する時期で、同時に、革命の気運が高揚する一方、資産階級を代表する国民党と無産階級を代表する共産党が協力する「国共合作」の亀裂が徐々に拡大していった中国と、その渦中にある中国人への再認識の時期でもあった。この時期の作品に登場する中国人は革命家、労働者、農民、地主、軍閥といったように多様化しているのも、里村欣三自身の革命と中国に対する考え方の混乱ぶりを象徴しているのではないかと推測できよう。

3. 植民対象で敵対する他者

満州事変発生後、1931年11月下旬から12月にかけて、里村欣三は『改造』から従軍の誘いを受けて満州に渡った。もはや支那苦力とともに働く放浪時代の「ルンペン」労働者ではなく、その身分が従軍記者に転換した里村欣三の目に映る中国人の姿も昔とずいぶん違うようになったのである。

満鉄沿線の日本軍占領地における日本人の熱狂と、鉄道から離れた満州奥地の中国人の沈黙が好対照になっていることに、里村はまず気づいた。「最初のうちは支那人の無知を嘲笑い、愛国心の欠乏を罵倒していた兵隊も、いつの間にかこの支那人の無関心な態度のうちにひそむ、無限の底力に一種異様な感じにとらわれるらしい。」(里村 1964: 19) これは、植民者である日本人として、植民の対象となる中国人を見る目である。中国人の民族的な「無限の底力」に対する侵入者の「異様な感じ」は、いわば植民者と被植民者との敵対を敏感に捉えたものといえよう。里村欣三はこの時、かつての国境のない労働者同士の連帯感を忘れて、中国人を敵国の人間、植民占領の対象と考え、帝国日本の立場に立っていることは明らかである。

従軍記者として書き上げたルポには中国人への関心も同情も見られず、むしろ帝国日本と植民地満州との対置の中で、日本軍隊の一員、少なくとも付属者の一員として、遠く満州の戦乱と、ほとんどすべて柔順に沈黙を保つ植民対象の中国人を見ていたのである。

かつていっしょに働いていた支那苦力もついに車窓からの眺めとなった。「兵舎や停車場の給水タンクに、苦力の群れが、えんえんたる隊列をつくって水をかつぎあげている。」(里村 1964: 19) 車窓からの眺望は従軍記者として日本占領軍と一体化した里村欣三と支那苦力との間に越えられない距離が開けたことを暗示した。

中国人研究者の間では日本文学者が満鉄の汽車を利用する満州の旅を記した旅行記を特別扱いする傾向が見られる。南満州鉄道株式会社は植民戦略の一環として、日本の満州侵略に多大な役割を果たしたのは周知のことではあるが、夏目漱石を始め、菊池寛・室生犀星たち文学者を満州へ招待し、漱石の『満韓とところどころ』など満鉄沿線の風景を描いた

旅日記を数々残し、文学の面でもかなり影響のある存在であった。これらの作品は中国では「満鉄叙述」とまとめられ、「『満州鉄道』叙述は日本の文化と政治をイメージしており、日本が如何に『民族国家』の範疇を超越して、帝国神話を築き上げたかを体現したのである。」（朴 2017：36）

里村欣三は直接満鉄の招待を受けた者ではないが、従軍記者として満州にいた間、ほとんど満鉄の汽車で移動していた。そのため、彼が車窓を通して眺めた風景は、かつての日本文学者が描いた満州と重なる部分が多かった。いわば、満鉄は日本という国の国境線をそのまま鉄道によって引かれたような移動の政治空間である。この空間は満州に実在しているながら、本質上では満州ではなく、日本そのものと見てよからう。そのため、汽車の中にいる里村と、その外にいる支那苦力は、植民国日本と植民地満州にそれぞれ帰属していると思われる。

自分は日本人だという自意識のもとで、里村は満鉄の巧みな運営と、上手に満鉄を活用した鉄道戦争の戦術を褒め称える一方、「満蒙の權益を無産階級へ」（里村 1964：29）ということは実現可能かどうかをルポの中でいろいろ論じたのである。プロレタリア作家としての階級意識はまだ残っているにしても、もうかつての国境や民族を超えたプロレタリアートの友情が消えてしまい、そのかわりはっきりと自分を日本人の範疇に入れ、かつて兄弟と見ていた支那苦力をはじめとする中国の無産階級を、植民略奪の対象として考えるようになったのである。

満州事変従軍のルポは里村欣三が描いた中国人像に一線を引いたようなものといえる。

満州事変がおこると、日本軍部はたいへんな人気になり、新聞は連日戦勝を報じ、国民は歓呼の声をあげた。このあとは軍部は台頭し、日本は軍国主義時代に入ってしまう。時局の影響もあり、このあたりから、里村欣三はプロレタリア文学陣営から遠ざかり、転向の兆しが見え始めたのである。

後の自伝的作品『閣下』にも「わたしは前に申しあげましたやうに、からだの穢れてゐるものです。満州事變が起きる頃までである思想の中にあて、精神の持ち方は明らかに間違つてゐたものです。」（里村 1997：179）とあったように、満州事變までに「ある思想」——これは社会主義思想のことだが——を信じていたプロレタリア作家だったが、満州事變を境に思想の転換があったわけである。なので、満州事變従軍は最初の時はおよそ日本の中国侵略を支持するために承諾したものではなかったかもしれないが、実際満州という日本の海外植民地を自分の目で確かめ、身を以て戦場を体験し、軍隊と接触していた間に、里村欣三の考え方に変わりが生じたのではないかと考えられる。プロレタリア運動に参加し、政府から邪魔者扱いされる自分と、大日本帝国という民族的大ロマンに熱狂していた社会の雰囲気とがそぐわないのに気づき、どこか引け目を感じるようになったのではない

かと、従軍のルポにもその後の作品にも読み取れるのである。

たとえば、小説『苦力監督の手記』に登場した中国人は満州放浪時代のそれと比べればはっきり違っていた。日本人と対立する他者として描かれたのである。

一人称の主人公「俺」、水谷三郎は苦力監督を務めた日本人である。支那苦力は汽車で北上して、自分のふるさとから遠く離れたところで日本軍の兵舎を建てる仕事をしていて、この時「俺」はまだ中国人に同情する日本人であった。長い汽車の旅で苦勞した苦力たちを「俺」はすぐ働かせないで大目に見てやったら、おやじに叱られた。「貴様は何か言ふと、直ぐ支那人に同情しやがる。そんなことで仕事になると思ふか、馬鹿！」(里村 1935: 44)しかし、支那苦力は「俺」のせっかくの好意を裏切って、目的地に着いたその日の夜中に一人残らず逃げてしまった。

おやじがいろいろ工夫してまた新しい苦力を集めてきたが、これもまた夜中に逃げた。逃げたばかりではなく、監督の「俺」を気を失うまで殴って、指まで切ったのである。日本の兵士が騒ぎを聞いて駆けつけてきて、「俺」を助けた。「俺は生れて始めて、ふるひつくやうな嬉しさで、日本語の発音を聞いた。救はれたと思つた。」(里村 1935: 51)ここに至って、長く中国にいた主人公は中国人に対する好感と同情を失い、そのかわり、日本語の発音に感動すると同時に、自分が中国人の対立面に立っている日本人だという認識ははっきりとなった。いわば、苦力に逃げられ、傷つけられたことによって、「俺」の中国人に寄せる一方的な親近感は抹消されたのである。

もっと多い苦力を集めるために、「俺」は汽車に乗った。車内はほとんど中国の百姓であったが、「頭を辮髪にした中老の百姓が、何んと思つたのか、にやにや笑つて俺に席をあけた。」(里村 1935: 55)かつて従軍記者として満州事変に沈黙していた中国人の底力を感じた里村欣三は、今回中国人の態度に反感を持つようになった。「事變以来、急に支那人の腰が低くなつたのは事實だが、こんな風にあけすけに好意を見せられると、感謝よりも嫌悪が先きに立つた。」(里村 1935: 55)

といて、中国人の好意を嫌悪する里村は、中国人の反抗が好きかといったら、そうでもなく、好意が嫌だと思つると同時に、反抗はもっと堪えられなかった。

車内に泣き止まない赤ん坊と母親がいた。「俺」は赤ん坊がかわいそうで、砂糖水を母親にあげようとしたが、彼女は「俺」の好意を固く断つた。「車内の支那人から、ぢろぢろと顔を見られるのが苦しかつた。女に差し出したパンと砂糖水のひつ込みがつかない。俺は窓をあけて、疾走中の車外へ投げ捨てた。」(里村 1935: 57)「投げ捨てた」という一語からも、女の拒絶に対する「俺」の憤怒が感じられよう。

要するに、日本人の「俺」は支那苦力とのいざこざのあと、自分に好意を示す中国人に対しても、また自分を嫌がる中国人に対しても、すべて好感を持つことはできなくなった。

席を譲ってくれる中国人の好意を断った「俺」の好意はまた中国の女に断られたという二つの事件の連鎖的な発生は「俺」と中国人が敵対する二つの民族集団、或いは国家に属することを示したのである。

それだけでなく、最後に「俺」はずっとこの人こそ自分の理解者に違いないと信じてきた中国人遊女金鳳蘭まで日本人である「俺」を憎悪した。「お前のやうな碌でなしは、日本人の社會では大手をふつて威張れないものだから、自分たちより弱い、貧乏な支那人の中へまざり込んで、威勢をはりたがるんぢやないか。」（里村 1935：58）これは中国人妓女の話よりも、「俺」は今まで自分が日本人なのに中国人ばかりに好感を持っていた原因を突き止めた自己反省に当たる言葉と考えられる。「水谷三郎の植民地人に対する欺瞞と、自国と植民地との間にあつて働く彼の本質とが鋭く言い当てられる。」（澤 2005：49）と評されたように、「碌でなし」の自分が日本人の間では絶対感じられないような優越感を中国人に求める卑劣さを認識して、「俺」は再び中国人に好感を持つことさえ、恥ずかしくなったのであろう。

『苦力監督の手記』は語り手と主人公を重ねた「俺」が中国人に同情する日本人から、中国人を嫌悪する日本人に変わっていく過程を描いたことによって、里村欣三の中国人観がターニングポイントを通過したことを示したと思われる。

4. 戦乱を生き抜く卑劣者で救済すべき相手

日華事変発生直後、里村欣三は岡山で応召して、第十師団第十聯隊の本部所属通信隊の輜重兵となった。1937年8月15日、里村が所属する軍隊が太沽から上陸した。その後、ずっと1939年10月召集解除の命令が出るまでの2年余りの間、里村欣三は馬を引いて通信機材を運ぶ輜重兵として中国の華北華中戦線で数千キロを走破し、徐州会戦・台兒莊会戦・太行山八路軍掃蕩戦など数々の大きな戦役に参加した。一兵士として中国で作戦した体験は里村欣三を根本的に変えた。従って、主体の里村自身が変わったとともに、客体として映る中国人像も当然変わってしまったのである。

特に、満州事変のルポにも『苦力監督の手記』にも登場した日本侵略軍に雇われる支那苦力は、里村欣三が中国戦線で転戦していた間にも、日本軍隊に雇われていろいろな雑用に当たっていたため、『第二の人生』をはじめとする里村欣三の戦争文学にも多く登場したが、このような支那苦力はいったい自分の国に侵入してきた日本軍隊をどのように思い、またどのような気持ちで侵略軍に雇われているのだろうか。それについて、里村欣三の考え方が何度か変わったことがある。

最初の段階では、一般の中国人に対して依然として関心を持って、同情していた。

戦禍に苦しむ中国人の姿が痛ましかった。「この頃から、曠野を流浪している避難民の姿が急に目立つて来た。日本軍の追撃が急なので逃げ切れずに追いつかれ、慌てて引返へせば、また忽ち後続部隊にぶつかつてしまふ。彼等は曠野の中で戸惑つてしまひ、妻子を抱へ、大八車に家財道具を積み込み、或ひは揃へるだけの品物を天平棒で擔いで、あつちこちと彷徨つてゐるのだつた。」(里村 1940:360) 中国避難民に対する詳細な描写から見ても分かるように、里村欣三の中国民衆に対する関心と同情はまだ変わっていないわけである。

しかし、中国人の苦しみに同情する一方、愛国心も民族的自尊心もなく、自分の国に侵入してきた日本軍隊のところで働きの場と金儲けのチャンスを見出そうとする中国人のふてぶてしさにまた何ともいえない嫌悪感を抱いたのである。

里村欣三の部隊が上陸したばかりのとき、連日降り続く雨のせいで、道が泥濘んで、行軍が困難を極めた。その時、難行軍に苦しんでいる日本の軍隊を見て支那苦力がよってきて、軍隊の荷物を担いだり、馬を引いたりして、それに「水囊一杯の水が、二銭といふ相場」で(里村 1940:165) きれいな水を日本の馬が泥水に慣れないのに悩む輜重兵に売ったりしてお金儲けをした。

このような中国人の行為をまだあまり反感を抱かずに、ただ中国人の商売の上手なのに驚嘆して眺めていられたが、支那苦力を直接雇っていろいろと付き合っているうちに、だんだんとその卑劣さに嫌気がさすようになった。

軍隊が石炭受領に行く時、苦力を雇って石炭を運ばせたら、彼らは運びながら密かに石炭を服の下に隠したりして盗んだ。働くことよりも盗むことを楽しんでいる苦力たちを見て、主人公の並川兵六が考える。「彼等は彼等の祖國をどんな風に考へ、またこの事變をどんな風に見てゐるのであらうか？ 恐らくどのやうな環境にも直ぐに馴染んでしまつて、物乞ひのやうな哀れさで生きて行く彼等には、兵六の期待するやうな批判も意志も持たないのであらう。蔣介石政權の下に於いても、このやうな哀れな生存を續けて来たのであらうし、また日本軍の占領下に置かれても、同じ生活の繰り返しに過ぎないのであらう。彼等には蟲ケラのやうに、生存の本能があるだけだ。」(里村 1941:29-30) ここには、植民対象の中国人をいっそ人間の範疇から排除して本能によって生きている虫けらみたいなものでしかないやうな、軽蔑と嫌悪を交えた眼差しで見えていたことは明らかである。しかもその蔑視は石炭を盗む個人的行為に対するものではなく、中国人という全体を対象として、いわば中国人の国民性として認識したわけである。しかし、中国人を軽蔑しながらも、蔣介石政權に従順だった中国人はこれから日本の植民占領にも従順であらうという推測が成り立つ安心感も薄々感じられたと思う。

かつて満州事變後従軍記者として渡満した時、里村欣三が中国人の沈黙の中に民族的底

力が潜んでいるという判断をくだしたこともあるが、その後、『苦力監督の手記』において中国人に好感を持つ自分自身を恥ずかしがるような自己反省を経て、『第二の人生』三部作をはじめとする戦争文学となると、戦争対象である敵国の国民として中国人を眺めた時、批判と軽蔑が大部分を占めるようになったのである。

関心と同情が批判と軽蔑に変わったとき、里村欣三の中国人観は徹底的に転覆してしまった。いわば、国境や民族を超えた階級的連帯感を持っていたプロレタリア作家であった里村欣三がもはや存在せず、残るのは日本軍隊の一兵士しかなかった。

兵士として、支那苦力をはじめとする敵国の国民である中国人に同情するのは心細いことで、兵隊の立場にそぐわないものだった。「聖戦の意義がはつきりと把握できないモヤモヤした空虚感が、兵六をして支那人に親しみをを持たせる結果になつたのではあるまいか。または敗残の窮民に必要な同情を示すところに、かつての思想の残滓が見られ、支那人を愛することによつて卑劣な思想的満足を味つてゐたのではなからうか？」（里村 1941：31）ここでは主人公の並川兵六は自分が中国人に同情するのは、日本の軍国主義戦争の意味が把握できないことと、思想——つまりプロレタリア作家として持っていた社会主義思想——の残滓が残っていることに起因したものだとして、自己反省を行ったが、里村欣三はこの言葉を以てかつてのプロレタリア作家であった自分と、その時の自分の中国人に対する関心と好感のすべてを否定したのである。今や軍隊の一員として、完全に国の立場に立ちきれず、また社会主義者であった昔の自分と決別しきれない状態を完全に変えなければ、「一人前の立派な兵隊にすらなれない」（里村 1940：8）と考えていたため、中国人を意図的に批判し、敵対意識を募らせる傾向があった。

『『第二の人生』は第一の人生への決別でもあろう』（浦西 1980：86）といわれたように、転向声明を正式に発表したことのない里村欣三にとって、『第二の人生』三部作は転向声明に当たる作品と考えられよう。

といて、里村欣三が中国人への同情を否定して、敵国の国民とみなすようになったあと、中国人を憎むようになったかといえ、事実はむしろ逆である。大日本帝国の一環として、植民の対象、大東亜共栄圏の中に納めようとする相手である以上、一般の中国民衆は日本軍部の宣撫工作の重要な対象であるため、転向後軍部御用作家となった里村欣三は中国民衆と日本軍部の親善を称え、日本の侵略戦争を正当化させなければならない立場にあった。

中国人の卑劣さへの批判と、中国人を従順な植民対象にしようとする意図との矛盾を解決するために、里村欣三は日本軍部の宣伝に格好の口実を見つけた。「われわれは支那を征服するために戦っているのではない。日支の両民族が共存共栄の大理想と秩序を東亜に建設するために戦っているのだ。つまり支那を愛しながら、悪い思想に憑かれた部分の支那

と戦っているのだ！」(里村 1941:67) というように、日本の侵略戦争を、中国を改善するために行われたものにしていく。

里村欣三によれば、支那苦力の泥棒行為も中国人の無貞操もすべて蒋介石政権のせいである。日本と戦っている「悪い思想に憑かれた部分の支那」とはつまり蒋介石政権にほかならない。黄河の堤防を爆破して、無数の中国の百姓に災難をもたらし、日本軍の行軍に多大な困難をもたらした蒋介石の行為に憤怒を感じ、また数々の戦友を失った悲痛から蒋介石軍への敵対意識がだんだん強くなってきたため、かつてのプロレタリア作家時代に存在していた軍閥と蒋介石政権への反感が強い批判に変わったのである。この蒋介石政権は孟子廟を荒らして、抗日のスローガンをその柱に掲げ、中国人の精神信仰を破壊してしまったせいで、中国人は卑劣になったのだと、里村は分析していたが、この荒れ果てた「孟子廟は、完全に皇軍の手によつて守られたのだ。一ヶ所も破壊の跡はなかつた。」(里村 1941:136) 蒋介石政権が中国人の民族信仰を破壊したのに対して、日本人がそれを救ったという対照の中に、日本の中国侵略を正当化させようとする意図が明らかに読み取れよう。

しかし、蒋介石政権を否定した里村欣三ではあるが、中国の百姓にとっても、多くの犠牲者を出した日本自身にとっても呪わしいこの戦乱はいったい何に起因したかという、究極な根本を掘り下げなかったままである。立派な日本人、立派な兵隊になるということは、同時に、軍国主義日本が中国を侵略する行為を妥当だと判断し、自分もこの侵略戦争の加担者になることを意味していることを、全く考えていなかった。もちろん、時局の制限もあるし、日本人という身分をもつ里村欣三本人はそこまで考えなかったのも無理はない。

それはなにも里村欣三ひとりだけではなく、戦争に便乗した多くの日本文学者も同じく軍部の宣伝を認め、自分を日本という大きな集団の中へ帰属させ、中国をはじめとするアジア諸国を他者にして、日本の植民侵略戦争は正当だと書いたのではなからうか。

戦争はいつ終わるか、どのように終わるかは、分からない。だから文学者が選ぶべき態度は何通りかある。ひとつ目は筆を折って完全に沈黙することだ。しかしその場合、戦争が終わったあとに自分の仕事も影響力もなくなってしまうかもしれない。ふたつ目は、極力戦争批判の言葉をおさえて、文学の仕事をつづけることだ。その場合戦争が終わったあとに、仕事と影響力は残るかもしれないし、逆に戦争責任を追及されるかもしれない。みつ目は、軍部に便乗して戦争を賛美することだ。その場合、勝てばよいが負けたら責任を取らなければならない。

以上のみつつのどれをとっても、それは賭けである。里村欣三が選んだみつ目の生き方は不誠実だし不義だが、ひとつ目とふたつ目はどちらも正しいとはいえない。そもそも最も戦争責任を負うべき軍部の指導者の中には、戦後に生き延びて政財界で重きをなした人物が少なくない。それに比べると、あまり文学者の戦争責任を厳しく追及するのはお

かしいとも考えられる。

文学者の戦争責任は日本では敗戦直後から 20 年ほどに渡ってさかんに論じられてきたが、今は論点のとりあげ方に共感できない日本人学者が多く、あまり論じられなくなっているようである。しかし逆に、中国では近年来日本の中国侵略に関する研究が歴史、文化、文学といった各分野でブームとなっている。「近年来、種々の歴史と現実の原因で、日本の中国侵略史をめぐる研究が学術界の焦点となり、日本の戦争文学、中国侵略文学及び日本文学者の戦争責任についての研究は我が国の日本文学研究界でも広く注目を集めている。」（王 2018：103）たとえば、中国の社会科学研究の最高レベルと主流動向を代表すると考えられる中国国家社会科学基金は年に日本文学関係のプロジェクトをおよそ 15 項前後設立するが、去る 2018 年だけでも、「重点項目」として「戦後日本文学界の戦争責任論争及びその思想史的位相」、「一般項目」として「日本戦後『第三の新人』作家の戦争叙述と日常認知研究」があったように、二項目も日本文学者における戦争問題に関するものが設立されたのである。今後この動向は中国でさらに継続し、また拡大していくだろうとほぼ推測できる。

このように見てみれば、文学者の戦争責任について、日本人学者と中国人学者の間には認識上のズレが存在していると思われる。

里村欣三を例にすれば、日本人学者が彼の転向と戦争文学に対して、善意的な理解を示した人が多く、もともと弁解する余地のない里村の戦争への徹底的な支持をも、事実をねじ曲げてまで弁解しようとする意図が見られ、さらにどうしても弁解できないときも残念という一語ですべてを解消しようとしている。もっとも典型的なのは戦争末期に里村欣三といっしょにフィリピンに渡ったことのある今日出海の説で、里村欣三の行為を「彼は只ベンを執る従軍ではなく、戦場を裨の場、灌頂の道場と心得て、出来るだけ激しい戦闘、苦しい戦場へと志願した。」（今 2013：325）というふうに解釈し、日本軍国主義戦争のために害されたアジア諸国の人々のことを全く念頭に置かず、ただ里村欣三というひとりの人間にかぎって戦争の意味を考え、里村欣三のために弁護していた。

同じように、里村欣三の従軍を、いろいろな角度から弁護した日本人作家や学者は実に多い。「次々に戦争ものを書かされることを断りきれず、最後にはほとんど自殺に近い形でフィリピンに行かざるをえなかったのもすべて氏のこの人の良さと弱さのためではなかったのだろうか。」（堺 1978：32）「唯、彼の転向の角目には、一身上の便宜や處世術が相当影響してゐたが、あとでは彼は自分の心理の暗示にひつかかつて便宜を信念にかへてゐる。」（平林 1960：25）などなど、人の良さで軍部の要求を断りきれないとか、心理的暗示にひっかかったとか、いいようは本当にさまざまである。

また、里村欣三がその戦争責任で戦後批判されたのに不満を表明している日本人学者も

いる。「戦後この国の文学者たちは、作家の戦争責任を里村一人に背負わせ、自身はもともと戦争に反対であったかのような自己宣伝を行った。なかでも、ある評論家は『あわれをとどめたのは里村欣三』だと、憎悪と軽蔑を露骨に示して彼を非難した。」(高崎 1989: 2-3)とあるように、里村欣三を守る意図が赤裸々に示されたのである。

日本人学者が以上のように弁護弁解に傾くものに対して、中国人学者は全く逆で、戦時中における日本文学者の便乗主義を辛く批判した人が多い。

早く 1930 年代から、日本留学も長く、里村欣三と上海で会っていっしょにお酒も飲んでいた郁達夫が「日本の文士はほんとうに中国の娼婦にも及ばないものだ」(郁 2014: 241)と、日本文学者の戦争支持を罵倒していた。

近年来、中国では日本文学者の戦争文学に対する批判の気運がますます高まり、あくまでもその戦争責任を追究すべきだという主張が増える一方である。しかし、その中で、左翼日本作家の「転向」を、もっぱら中国人の立場からではなく、もうすこし角度を変えて文学自体から見てみようという主張もわずかながらも中国では見られる。「左翼転向作家の戦争文学作品について、中日両国の研究者の評価がさまざまで、『中国侵略文学』『文学戦犯』と批判したのもあるが、しかし角度を変えて、左翼作家であることを考え、文学本体と時空を超越するテキストの独立性から把握すれば、これらの作品は創作意図や時代の制限および戦争当時の社会影響からみれば、確かに中国侵略文学の範囲に属するが、左翼作家が若い時に覚えたマルクス主義の階級意識と平民意識を考えに入れ、また作品全体の漠然とした反戦意識を分析すれば、冷静な読者なら考え直す契機を見出せるかもしれない。」(李 2012: 70)

この話は里村欣三についてもいえると思われる。戦時中における里村欣三の従軍作家としての活躍と軍部御用作家としての文学活動をあくまでも批判すべきだと思うが、一方、その中に含まれた里村欣三という人間、プロレタリア作家から従軍作家に転じた彼自身の心理的要因と、彼が身を置かれていた時代とその時代特有なイデオロギーを、もっと考慮に入れ、時代と国家に逆らえなかった無力なひとりの日本人を、その中から見いだせるかもしれない。

注

- 1) 里村欣三の閨歴に謎が多い。里村欣三の中国体験について、本文は詳細な資料の考証に基づく大家慎吾の著書『里村欣三の旗—プロレタリア作家はなぜ戦場で死んだのか』(論創社 2011)を根拠とする。
- 2) 中国では共産党を党旗の赤い色によって「紅」と象徴的に称するのに対し、国民党をその党旗の色で「白」と称する。「白色恐怖」は中国語で、国民党が共産党を排斥し、共産党の人を逮捕したり殺したりするクーデターのことをさしている語。

参考文献

- 朴婕（2017）“‘満洲’铁路叙述与日本帝国神话”《外国文学评论》2017年第3期，35-48頁。
- 平林たい子（1960）「二人の里村欣三」『自伝的交友録・実感的作家論』文藝春秋新社，9-26頁。
- 郁达夫（2014）“日本の娼婦と文士”《郁达夫散文集》万卷出版公司，240-242頁。
- 今日出海（2013）「同行二人—故里村欣三君のこと」『里村欣三の眼差し』吉備人出版，323-330頁。
- 李俄宪（2012）“二战时期日本左翼作家文学转向问题研究”《外国文学研究》2012年第6期，63-71頁。
- 李弘慧（1993）“对侵略战争的诅咒—评里村欣三及其小说《旅顺》”《日本研究》1993年第1期，65-68頁。
- 王升远（2018）“对‘明治一代’的追责与‘大正一代’的诉求—《近代文学》同人战争责任追究的细节考辨”《外国文学评论》2018年第3期，103-132頁。
- 堺誠一郎（1978）「或る左翼作家の生涯—脱走兵の伝説をもつ里村欣三」『思想の科学』第6次（通号93），24-34頁。
- 里村欣三・小牧近江（1927）「青天白日の国へ」『文芸戦線』第4巻6号，38-46頁。
- 里村欣三（1928a）「動亂」『文芸戦線』第5巻3号，25-44頁。
- 里村欣三（1928b）「放浪病者の手記」『中央公論』第43巻5号，63-78頁。
- 里村欣三（1930）「兵亂（4）」『文芸戦線』第7巻4号，168-181頁。
- 里村欣三（1935）「苦力監督の手記」『文学評論』第2巻8号，27-58頁。
- 里村欣三（1940）『第二の人生 第一部 津浦戦線』河出書房。
- 里村欣三（1941）『徐州戦』河出書房。
- 里村欣三（1964）「戦乱の満州から」『昭和戦争文学全集Ⅰ 戦火満州に挙がる』集英社，17-37頁。
- 里村欣三（1985）「苦力頭の表情」『日本プロレタリア文学10（「文芸戦線作家集」1）』新日本出版社，165-173頁。
- 里村欣三（1997）「閣下」『里村欣三著作集 第10巻（短編創作集）』大空社，179-186頁。
- 澤正宏（2005）「里村欣三の文学—徴兵忌避をしたプロレタリア作家から一兵卒への道」『言文』（通号53）2005年度，36-51頁。
- 祖父江昭二（1998）『近代日本文学への射程—その視角と基盤と—』未来社。
- 高崎隆治（1989）『従軍作家里村欣三の謎』梨の木舎。
- 浦西和彦（1980）「里村欣三の『第二の人生』（読む）」『日本文学』第29巻19号，83-88頁。
- 横光利一（1970）「上海」『現代日本文学大系51（横光利一 伊藤整集）』筑摩書房，5-96頁。